

昨年12月からの豪雪に伴うリンゴ樹の被害について、弘前大学大学院理工学研究科の石田祐宣准教授（気象学）は8日の取材に対し、「今冬は温暖化により雪が湿って重かった。さらに一度に大量の雪が降る『ド力雪』が多く、被害拡大につながったとみられる」との見方を示した。

石田准教授は国の防災科学技術研究所などと1～2月に

温暖化被害拡大一因か

弘大・石田准教授

津軽地方28地点で調査を行い、今冬の雪が重かったことを確認している。通常の新雪は1立方メートルあたり約100キロだが、今冬はほぼ全ての調査地点で同約350～400キロだった。

また、石田准教授によると、雪が湿って重くなった要因は平均気温の上昇。積雪量が多かった2012年度の冬と比べると、今冬は約2度高かった。雪に含まれる水分量が増え、湿った重い雪になった。

日本近海の高い海水温と上空

水分増え雪重く、雲増

の強い寒気が重なったことで、雪雲が発達しド力雪が頻発した。少雪だった23年度の冬は海水温が高かったが、上空の寒気は弱かった。「平均気温の上昇や高い海水温には温暖化が関係していると考えられる。温暖化が進むと、今冬のような豪雪の年とほとんど雪が降らない年に分かれる可能性がある」と語った。

（工藤貴光）

※この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです。

東奥日報社に無断で転載することを禁止します。

【問合せ先】弘前大学理工学研究科 E-mail:r_koho@hirosaki-u.ac.jp